

世界を  
良い方向に  
変えていく

# 服のチカラ

THE POWER OF CLOTHING

「特集」  
子どもたちに  
自由な  
よろこびを。



17  
WINTER

UNIQLO  
Life Wear

←いま注目のアーティスト  
ジェイソン・ポーランは、  
バナナ、紙コップ、ビーチボール、  
Tシャツ、ペンを用意した。

ニューヨーク、マンハッタン。  
5番街のユニクロに  
ホームレスシェルターに住む  
子どもたちがやって来た。

なにが始まるのかな？



# 絵を描こう。

ジェイソン・ポーランといっしょに。



© Jason Polan

ニューヨークでいまもっとも注目されているアーティストはジェイソン・ポーランド。

彼は毎日、スケッチブックとペンを片手に、街へ出かける。路上で、コーヒーショップで、地下鉄で、たまたま出会う見知らぬ人々を描く。

ひとりを描くのに1分とかからない。白い紙の上を、ペン先は迷わずスルスル動く。その人ならではの姿が瞬時にとらえられたスケッチに、いつどこで出会ったのか、彼自身による手書きのコメントが添えられたら、絵は完成だ。

ジェイソンのブログ「EVERY PERSON IN NEW YORK」にはほぼ毎日、絵がアップされる。同じタイトルの初めての画集も2015年に出版された。仕事の依頼をしてくるのは、「ニューヨーカー」や「ニューヨーク・タイムズ」など、老舗の雑誌や新聞である。無名の画家があれよあれよと名を成してゆくストーリーは、80年代に活躍したキース・ヘリングのそれと似ている。

ジェイソンは1982年ミシガン州生まれ。子どもの頃から絵を描くことが好きだった。ニュー

ヨークにやってきた理由のひとつは、ニューヨーク近代美術館(MoMA)が大好きだったこと。彼はMoMAで働きたいことを履歴書で伝えるために、MoMAに展示中の全作品のスケッチをして同封した、という有名な話がある。

残念ながら採用はされなかったが、彼はアーティストとして人気を集めるようになり、いまやMoMAのイベントにアーティストとして招かれ、MoMAのホームページでは、彼の創作活動が動画で紹介されるまでになった。

彼の絵の魅力をどう言えばいいだろう。

ひとりひとりが別の人生を歩んでいること。それぞれがかげがえのない人生であること。ニューヨークで暮らす人々への、ことばでは伝えきれない彼の愛情が、迷いのない線となって浮かんでいる。それは人生を肯定する力だ。

ブログには、次にどこでスケッチするか、予定が書かれている。マンハッタンの街角で野球帽をかぶったカジュアルな姿で絵を描く人を見かけたら、それはたぶん、ジェイソン・ポーランド。





# Jason Polan × UNIQLO

注目のアーティスト、  
ジェイソン・ポーランが  
ホームレスシェルターで暮らす  
子どもたちと、絵を描いた。

ユニクロのニューヨーク5番街店は、  
ニューヨーク近代美術館 (MoMA) の目と鼻の先。  
MoMAと提携したイベントも頻繁に行われ、  
ニューヨーク注目のスポットになっている。

photographs by Jason Lewis



アメリカでは、自分の家で暮らすことができなくなる人々が年々増えている。ニューヨーク市でも、ホームレス問題は深刻化している。

家を失う理由はさまざまだ。失業はもちろん、家賃の高騰、家庭内暴力、自然災害……など。

家を出ることになれば、その日から食事をするテーブルも、眠るベッドも、からだをきれいにするバスルームも、座ってテレビを見たり、飼っていた猫と遊ぶソファも、なくなる。親の事情にしたがって生きるしかない子どもにとって、それはどれほど悲しい出来事だろう。

2016年夏のニューヨーク市の調査では、公立小学校に通う子どものうち、自分の家を失って、「シェルター」と呼ばれる一時宿泊施設や、親戚の家、友人の住居に仮住まいする子どもがすでに8万人を超えたことがわかっている。この数年で最悪の状況だ。

ホームレスシェルターで仮暮らしする子どもた

ちを、ユニクロ ニューヨーク5番街店に招待して、半日だけ自由に絵を描いてもらったらどうだろうか。ユニクロのスタッフとジェイソン・ポーランのあいだに、そんなアイデアが生まれた。

始まりはシンプルだった。ジェイソン・ポーランの絵をあしらったTシャツの企画が進むなかで、店舗限定でジェイソンのマンハッタンの手描き地図を用意し、ユニクロの店舗で彼と絵を描いて遊ぶイベントも企画しよう、となったとき、ホー

ムレスの子どもたちと絵を描くのはどうだろう、という話もちあがったのだ。

「子どものころ、いつも絵を描いていたからね。子どもたちに絵を描くおもしろさを体験してもらいたいし、なにより僕自身が子どもとっしょに絵を描いてみたいんだよ!」(笑)

このささやかな試みが、子どもたちにとってどんな意味をもつことになるか。やってみなければわからない。ならば、やってみよう——。

## ユニクロ ニューヨーク5番街店

MoMAとのパートナーシップにより、服とアートが出会う場所として、「SPRZ NY」(エスピーアールゼット・ニューヨーク)のプロジェクトでも知られている。アーティスト別のコーナーやイベントスペースも用意されており、店内にはスターバックス コーヒーも出店。MoMAは金曜日の午後4時から8時まで、ユニクロの提供により、入場は無料となっている。





ユニクロ ニューヨーク5番街店に集まった子どもたち。  
 バナナに絵を描く？ 紙コップに絵？  
 ビーチボール、もらえるんだ！  
 なにを描いてもいいって言われてもなあ。  
 ちょっと困ってお隣の様子が気になる子もいれば、  
 真剣な顔で紙コップに取り組む子もいる。  
 バナナ、紙コップ、ビーチボール……  
 書き終わったら、いよいよ白いTシャツだよ。

ねえ、  
 見せてよー。



Jason Polan × UNIQLO



アート、イズ  
エブリ...



3台のバスがユニクロ ニューヨーク5番街店に向かっていた。子どもたちは、マンハッタンから少し離れたブルックリンやクイーンズにあるシェルターからバスに乗ってやって来る。バスに揺られていると、高層ビルが林立する光景がだんだん近づいてくる。マンハッタンだ。

これからいったいなにが始まるのか、なんだかよくわからない。絵を描くのよってお母さんは言ってたけど。それって学校の勉強みたいなもの？ 眠いし、めんどくさい……そんな声が聞こえてきそうな顔ばかり。

午前9時30分。バスがユニクロの前に到着。ガラス張りの明るい店内に入ってくる子どもたち。戸惑った顔のままの男の子もいれば、わあ！とびっくり、興味津々の顔に変わる女の子もいる。ここファッションのお店？ 服は大好き！

一階から中二階へと向かう広い階段に座って、今日の「お絵描き」についての説明をジェイソン・ポーランとユニクロスタッフから聞く。みんな少し神妙な顔。でも、スタッフがおもしろいことを言うと、クスッと笑い声もおこる。

「絵は、誰がどんなふうに描いても自由。好きなものや描きたいものを描けば、どんな絵でも、それはアートになる。自分の顔を描いても、友だちを描いてもいい。うれしかった思い出、気に入ったことばを描いてもOK。こうでなければダメということはないし、アートには失敗や間違いもない。

きみたちが絵にすれば、身のまわりのものすべてがアートになるんだ」

「みんなとこれからいっしょに絵を描くジェイソン・ポーランは、ニューヨークの街を歩いている人、地下鉄や公園のベンチに座る人、たまたま出会った知らない人を、毎日、ペンだけで描いている。これもぜんぶ、アート」

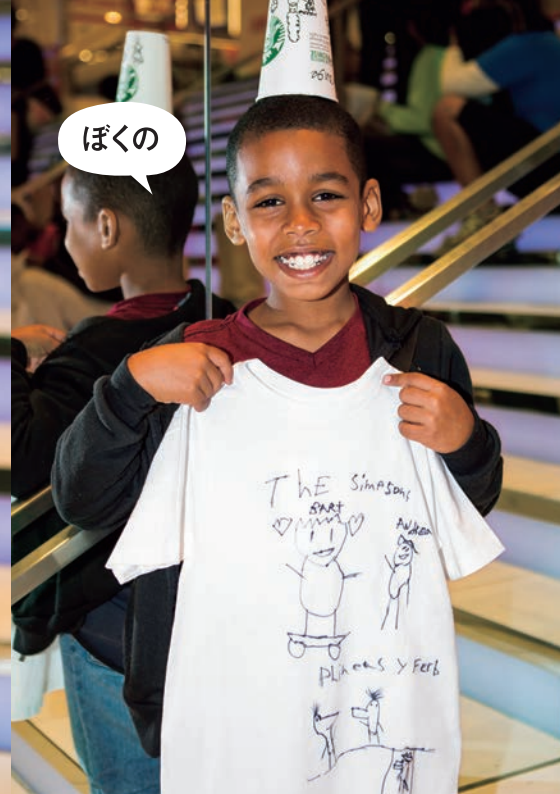
子どもたちは、いつもの学校の授業とは違う雰囲気に馴染んでくる。先生というより、気安いお兄さん、お姉さんに話を聞く感じかな？

「絵は白い紙に描かなければダメ、ということもない。バナナにだって、テイクアウトの紙コップにだって、海辺やプールで遊ぶビーチボールにだって、なにに描いてもかまわない。ただし今日、このあと家に帰ってテレビや冷蔵庫にいきなり絵を描きはじめたら、お父さんやお母さんの機嫌はぜったい悪くなる。だから、それはやめておこう。きみたちのためだ」(笑)

説明はあっという間に終わって、子どもたちに黒いペンが手渡された。そして、階段を上がった中二階の大テーブルにはみんなにバナナが1本ずつ。さあ、お絵描きの時間だ。

バナナに絵を描くなんて初めて。なにを描けばいいのかな——と考えこんだり、バナナを顔に見立ててさっそく描きはじめたり。ジェイソンはみんなに声をかける。

「おもしろいね」「お、いい感じ」「うまいなあ」。







どうだった？



おもしろ  
かった！



バナナ、紙コップ、ビーチボール、そして最後に、無地の真っ白なTシャツ。いきなりTシャツに描くのではなく、いろいろな立体に描く体験をしたので、すっかりリラックスして集中している。いい感じで静かになってきた。

絵を描くことは、物事をじっくり見ること。ジェyson・ポーランはそう考えている。子どもたちは絵を描きながら、頭のなかで、あるいは心のなかで、なにかをじっと見ている。誰にも命令されることのない、絵を描く自由。

描き終えた子どもたちは、それぞれに達成感を味わっているような、満足そうな顔だ。

帰りには、ひとりひとりに手提げ袋が用意され、バナナ、紙コップ、ビーチボール、Tシャツ、それからお土産のお菓子を入れてもらう。

帰宅するバスのなかは、行きとは違って変って、笑顔でおしゃべりしたり、バナナを食べたり、にぎやかで明るい。

「やってよかったね！」ジェysonもイベントの結果に大満足だった。シェルターで待っていたお父さんも、娘の顔を見てすぐに笑顔になる。マンハッタンへの短い旅が、よい体験になったと肌で感じたらしい。

貧困家庭への支援には、住環境の提供や経済的補助がなによりも必要だ。しかし、子どもたちには、たっただけに役立つわけではない経験も必要ではないか。それは子どもたちの未

来につながる経験、未来の力となるようなもの。

自分の描きたい絵を描く。描いた絵を見た大人から、いいねと評価される。ここにこうして生きている自分が、絵を描くことで肯定されること。ほめられることによって、ささやかなよろこびを味わい、自信につながってゆくこともあるかもしれない。たった数時間の経験が、小さな芽になって、やがておおきく開いてゆくこともある――。

アメリカにはこういう言い方があるという。「魚を与えるのではなく、釣り竿を与えて、魚の釣り方を教えない」

ユニクロと長期的なパートナー関係を結んでいる、ニューヨーク市のホームレスサービス局と連携し、ユニクロ ニューヨーク5番街店では、年に4回、ホームレスシェルターで暮らす子どもたちを店に招待している。まず、店の間近にあるMoMAの開館前に、専門の美術ガイドつきで特別に入館し、ユニクロのグラフィックTシャツにも使用されているアンディ・ウォーホル、ジャン＝ミシェル・バスキア、キース・ヘリング、草間彌生など、MoMAが展示するアーティストの作品をゆっくり鑑賞する。そして子どもたちはユニクロに戻り、Tシャツに絵を描く、というワークショップだ。

今回はプロのアーティストがやってきて、子どもたちといっしょに絵を描く、特別版となった。

次は、誰に来てもらうことにしようか。

服の会社だから、  
できること。

世界各地に店舗を展開するユニクロは、それぞれの国と地域で子どもたちに求められている最善のものはなにかを探りながら、さまざまなプロジェクトに取り組んでいます。



## 知的障がいのある子どものための 「お買いもの体験」

シンガポール

ふだんなら家族といっしょに買いものに行く子どもたちに、自分の意志で買いものをする経験をしてもらったらどうだろう。ユニクロのスタッフは学校を訪ね、学校の先生と相談し、まず子どもたちとゲームをして仲良くなることからスタート。そして、ユニクロの店へ。子どもたちはもちろん、さまざまな工夫を重ねたスタッフや先生も、貴重な経験になりました。



◀動画はここから  
<http://www.uniqlo.com/jp/csr/archive/#prettyPhoto/14/>

## “届けよう、服のチカラ” プロジェクト

日本

着なくなった子ども服を子どもたちが回収し、難民など世界中で服を必要としている人々に届ける活動です。ユニクロの社員が講師となって出張授業を行い、子どもたちが校内・地域へ協力を呼びかけ、子ども服を回収・発送します。難民問題や環境問題、そして服のチカラを知り、社会貢献に気づききっかけになればと願っています。



◀動画はここから  
<http://www.uniqlo.com/jp/csr/archive/#prettyPhoto/11/>

ユニクロのこれまでの社会貢献活動の一部が、  
ショートムービーでご覧いただけます。

[www.uniqlo.com/jp/csr/archive/](http://www.uniqlo.com/jp/csr/archive/)

これまでの「服のチカラ」のバックナンバーは、  
こちらに全号揃っています。

[www.uniqlo.com/power\\_of\\_clothes/](http://www.uniqlo.com/power_of_clothes/)

## 明日の可能性をひらくために。 子どもたちのところに種をまく。

戦乱や貧困など、過酷な状況のなかに生まれ育つ子どもたち——いま世界各地で同じような事態が進行しています。先進国もけっして例外ではありません。明日の未来へとつないでいく、より良い社会をつくるために、子どもたちが幸せを実感できる環境はどのようにすれば実現できるのでしょうか。

私たちユニクロは「服の会社でできることはなにか」を考えながら、社会貢献活動に取り組んでいます。そして、これまでの活動のなかで、見えてきたことがあります。子どもたちのところは、ほんのささやかな経験からでも、おのずと柔らかくひらいてゆく、おおきな可能性を持っている、ということです。

私たちの子ども支援は、セルビアの難民や国内避難民のサポートをきっかけに始まりました。その子どもたちと家族に、ユニクロの仮店舗で自分の着たい服を選んでもらうプロジェクト「お買いもの体験」を実施したのは2013年のことでした。子どもたちひとりひとりの、いきいきとした反応と表情は、私たちがあらためて服の価値を見つめなおす得難い機会となりました。

「それ、とっても似合うね!」——店員、イベントスタッフとのやりとりをしながら服を選び、お金代わりにのクーポンを使って買いものをする楽しさ。そうして買った服を身につけるときにの満足感。子どもたちはこのイベントによって、社会の仕組みの一端を経験しつつ、自分で選んだ服を着るよろこびを味わいました。

服は暑さ、寒さから身を守るだけでなく、自分を表現する手段としても価値がある。難民の子どもたちのための「お買いもの体験」イベントも、ホームレスシェルターに暮らす子どもたちのための「絵を描こう」ワークショップも、彼らがいまおかれている状況を直接的に、すぐさま解決することにはならないかもしれませんが、けれども、彼らのところに、いつかどこかで芽吹くであろう、小さな種をまくことにはなるはずだ——。私たちはそう考え、子どもたちの明日の可能性をひらく活動を世界各地で続けています。

今年のクリスマス休暇のシーズンには、アメリカ各地の14の店舗で、ホームレスシェルターで暮らす子どもたちの「お買いもの体験」イベントを開催します。子どもたちのところに、彼らの未来につながる種がまかれること。そのサポートをする「服のチカラ」があることを、私たちは信じています。

「服のチカラ」は、ユニクロの社会貢献活動をさらに身近なものとしてお伝えし、感じていただくために、本号から手に取りやすいサイズ・デザインにリニューアルいたしました。

[www.uniqlo.com/jp/csr/](http://www.uniqlo.com/jp/csr/)



ユニクロの社会貢献活動について、さらに詳しく。

ユニクロ CSR

検索





Wow!

Jason Polan x UNIQLO